

---

# だからみんな死んでしまえばいいのに

和波智淳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だからみんな死んでしまえばいいのに

### 【Nコード】

N6228E

### 【作者名】

和波智淳

### 【あらすじ】

ある高校を突然席卷した殺戮の狂気。何故、悲劇は起きた……？

(前書き)

残酷描写・暴力描写があります。

嫌悪感を覚える方はどうかお読みにならないでください。

何故こんな事態になってしまったのか、桜井律子さくらいりつこには全く分からなかった。

「た……助け……て……」

誰にとも分からぬ言葉が口から漏れた。踏み出した足はぬるりとした液体を踏んで滑った。次に踏み出した足の下に感じたのは、ぐちゃりとした柔らかく生温い肉の感触だった。

今にも地に崩れ落ちそうな体を引きずって律子は走った。よろよろとした、とても走りとは言えないような動作でも、とにかくそうせずにはいられなかった。たった今踏んだものが、そして今も次々と足の下に現れてくるものが、つい先ほどまで生きていた人間の血や肉であることはほとんど意識していなかった。まともに考えたらたちまち走る力を失ってしまいそうだった。

自転車小屋の前をよろよろと歩く人影が目に入った。

「……ひ」

それが誰かなどと認識するより早く、律子は目を転がり落ちそうなほどに見開き、かすれた声を喉から漏らして足首を捻った。疲れ果てた足は思うように動かず、律子はざらざらと固く舗装された地面に倒れ込んだ。その地面の上にも赤い川の流れが這っていた。制服がその流れに浸るのを律子はほとんど感じなかった。倒れる前から既に似たような状態だったのだから。

自転車小屋の前にいた人影が、ぎょろりと虚ろな目を剥いて律子を見た。それが目で見るようにありありと律子には想像された。猫背で歩いていたその人物が、血で汚れ、ぼろぼろになった学生服を着た少年であり、右手にはごくありきたりの包丁を持ち、左手にはやはり血まみれになりぼろぼろに汚れた制服の少女の片手を握り、その上半身だけを引きずっていたことまで、ありありと。

「……！」

律子の喉から漏れた声は既に声にならなかつた。ただ血の川をさかのぼるように両手が地面を掻いた。血の川が流れ出す血の池のただ中に、わずかに白い布が目に入った。体のどこかを壊されて倒れたその女子の制服だつた。

右手の爪の先がその服にかかつたのをきつかけに、律子の脚は残る力を振り絞つた。前に振り出された足が踏んだのはぐにやりとして中は固いその女子の胴体だつた。足を取られよるめきそうになりながらどうにか律子は堪えた。再びよろよとした苦しい走りが始まつた。

絶えそつな意識の中で律子は行くあてを探していた。校舎の中からは今も高く低く悲鳴が響いていた。律子が教室から辛うじて飛び出した時よりは机や椅子や物のぶつかる音は少なくなつたように思えた。

最初、生徒たちは教室の机や椅子を投げ合いぶつけ合つて殺し合つたのだ。

何故そんな事態になつてしまつたのか、律子には全く分からなかつた。授業中、突然後ろの席から酷い物音がしたような気がした。振り返ると、同級生の男子の一人が椅子を前の席の女子の頭に叩きつけ砕き割つていた。たちまち周囲から悲鳴が沸き起こつたような気がした。それと思う間もなく誰かが誰かの胸倉をつかみ頭を殴りつけた。別の場所でも誰かがすぐ近くにいた誰かの腹を殴つた。別の誰かは指を無防備な誰かの目に突っ込んだ。ある者は机の中に隠していたナイフを取り出した。木と鉄パイプの机や椅子ががらがらと鳴り武器や防具や障害となつた。

全ては今起きている現実とは思えなかつた。律子は他の同級生とともにしゃにむに机や椅子を掻き分けて教室の外へ飛び出した気がする。気がするだけで本当はどうしたのか、酷く記憶が曖昧で分からない。次に見たのはやはり教室から生徒たちが飛び出しぶつかり跳ね飛ばし合い殺し合つている廊下の光景だ。

もみくちやにされる律子の傍らにいた同級生が不意に目に異様な

光を浮かべ高い叫びを上げて他の生徒に殴りかかっていった。彼女を迎えたのは頭に振り下ろされる室内掃除用の箒だ。そのまま柄が折れるまで箒を彼女に叩きつける生徒の脇を律子は恐慌しながら辛うじてくぐり抜けた。拳が、爪が、上履きを履いた足が、運動用具が本がどこからか持ち出された刃物が、あらゆる凶器が絶え間なく荒れ狂う中を律子は小突き回され突き倒され噛まれ髪をむしられ殴られ蹴られた。しかし律子は着実に進むことに成功していた。同じようにたどり着いた人の群れとともに律子は階段を半ば転げるように駆け下りた。人の群れの一部はやがて玄関にたどり着き飛び出した。

しかし高校の周りを囲む家々はやはり悲鳴と凶暴な音に満ちていた。律子が見たのは今しも一つの家が打ち壊され、血にまみれた屈強な男がどこかが折れ曲がった老婆を引きずり出す光景だった。校舎を飛び出した者の一部も嬉々として塀を乗り越え家々に襲い掛かった。呆然とした律子も後ろから殴り倒され、辛うじて恐慌に駆られ立ち上がって逃げた。玄関前の広場を、自転車小屋を、体育館前を、グラウンドを、凶暴な人間たちが殺し合う中を律子はひたすら走り回り逃げ回った。いつか足元には人間の体が転がり血の流れができた。しかし殺し殺され合う人の姿はいつまでたっても絶えなかった。

そつだ、逃げ場などないのだ。不意に律子の脚は止まりそのまま地面に崩れ落ちた。おかしくなったのは高校だけではないのだ。きつと世界中がこうなってしまったのだ。もしかして世界のどこかはおかしくなっていないなくても、そのどこかはきつと遠くて、今の律子にはたどり着けない。たどり着く前に……きつと、律子は。

「み・つ・け・た」

かすれた男の声が律子を打ち、律子は震え上がり振り向いた。異様な光を浮かべた目を丸く見開いた学生服の少年が右手の包丁を天に向けていた。よれて汚れた学生服はじつとりと濡れたように黒く血の臭いがした。律子の周りから立ちのぼる血の臭いよりもなお強

く。律子の唇が震え歯がカチカチと鳴り言葉にもならぬ言葉がこぼれ出た。

「た……たす……け……」

「きエえええああアアッ!!」

奇声を上げ包丁ごと飛び込むようにのしかかる少年を律子は目を閉じることもできず見つめた。傍らから飛んできた何か少年を打ち砕き吹き飛ばすのも。

ガッシャアと音をたてて自転車と少年が地面に落ちた。自転車に張り飛ばされた少年は、顔面と肩を砕かれ白目を剥いて自転車の下敷きになっていた。その自転車の脇に、細い体つきの学生服の人影がへたり込んだ。

「……え……」

地面に手を突き荒い息をついている少年の、眼鏡をかけた神経質そうな顔が律子の目に入った。この少年が自転車を振り回して包丁の少年を吹っ飛ばしたのだと律子が悟るより早く、眼鏡の少年は四つ這いのままよろよろと倒れた少年に近づき、その腕の側の地面に落ちた包丁を拾った。

「……大塚、くん……」

律子の呆然とした呟きに、眼鏡の少年は気がつき律子を振り返った。

「……なんだ、桜井……生きてたのか……」

「……どういう、こと……?」

不意に、目から熱い液体が滴り律子の言葉を遮った。この混乱に陥れられて初めて目にした正気を保っているらしい同級生の姿に、律子は感情の爆発を抑え切れずに叫んだ。

「どういうこと! どうして! なぜなのよ!? 何故……みんなおかしくなっちゃったの!? 絶対おかしいよ、こんなの……。なんで私たち、こんな目に遭わなくちゃならないの……」

「……僕にも、よく分からない……」

包丁を両手できつく握りしめ、俯いた大塚康浩は低い声で答えた。

「……でも……今なら、何となく分かる気がする」

「……えっ？」

泣きじゃくっていた律子は、康浩の異様な言葉に思わず顔を上げた。康浩は俯いたまま、暗いが、落ち着いた表情で言葉を続けた。

「……誰かが望んだんだよ。僕たちが……こうなることを。たぶん、僕たちには分からないけど、どこか、僕らの手の届かないところにいる誰かが……」

「で、でも……！ 誰が望んだっていうの！？ 誰が……こんな、みんなを狂わせるようなことができるっていうのよ！？ こんな普通の人間にできるわけじゃない！」

「それは……言っただろう、僕にもよく分からない。……でも、これはたぶん、何かの病気とかそんな突発的なものじゃない。きつと誰かの意図があったから……だからこんな酷いことになったんだ。じゃなきゃ、こんな……こんなとんでもないことができるもんか。

……誰か、きつと、この世界を思い通りにできるような奴じゃなきゃ……」

「そんな……！」

律子は混乱と怒りでくらくらする感覚を言葉に変えて爆発させた。

「そんなの、酷いじゃない！ そいつにはあたしたちの怖さとか、苦しさとかがわからないっていうの！？ わからないのにこんな酷い目に合わせるの！？ そんなのって……そんな奴、人間じゃないよ……」

「……そうさ。そいつは人間かもしれないし、そうじゃないかもしれない。ただ……僕らを思い通りに操る力があるってことだけは確かだ。もしかしたら、そいつらにとっては僕らなんか取るに足らない存在で……僕らが嬉しいとか、楽しいとか、辛いとか怖いとか思うことなんて、どうでもいいのかもな。だから……こんな酷いことが平気のできる……」

言いながら、康浩はゆらりと立ち上がった。その手に、倒れた少年から奪った包丁を握ったまま。



「……大塚くん……？」

呆然と律子は呟いた。何が起きているのか、理解できない。信じたくない。しかし不吉な感覚は次第に強まり力の入らない律子の全身を襲う。

「だから……」

ゆらゆらと操られるような動きで律子に歩み寄った康浩は、逆手に包丁を握った手を座り込む律子の上に掲げた。眼鏡が陽光を反射して白く光るのを、動くことのできぬ律子はただ呆然と見上げた。その律子の目の前で、康浩の両手が包丁の柄に添えられ……握りにぐっと力が込められ……頭上に振りかぶられ

振り下ろされた包丁の刃先は康浩の学生服を貫き胸へと吸い込まれた。

「だから、僕みたいになっちゃだめだ！　僕みたいに、そいつらの思い通りに死んだり殺されたりしちゃ……逃げろ……逃げて、殺しも殺されもしないで、生きのびるんだ！　桜井……律子……！」  
倒れる康浩を目を閉じることもできず見守っていた律子の全身に、不意に力が甦った。

「その日、原因不明の精神を狂わせる奇病によって、世界人口の三分の二が死滅した」

新たな作品の冒頭の一文を書き終えた作家は、一瞬だけ、満足したように原稿用紙の上のその文字を眺めた。そして、頭の中に湧き上がる構想を一刻も早く形にすべく、ただちに次の文に取り掛かった。冒頭の一文のことはすぐにその意識から消え去った。

その一つの文の向こうで、どれほどの命が消え去ったのか、一瞬たりともその意識には上らないままに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6228e/>

---

だからみんな死んでしまえばいいのに

2010年10月8日16時00分発行